教育総合センター
だより

ＮＯ．１７３
令和　６．９．１

『三つ子の魂を発見せよ』

尼崎市立立花北小学校
校長　　佐　野　正　信

昔から日本の国には『三つ子の魂百まで』という言葉があります。どうやら様々な解釈があるようで､｢幼いうちにしっかりと躾けておくことが大事である」とおっしゃる方が少なくありません。私の場合､｢その子にはその子にしかない大切な種（個性）が幼いうちからしっかり備わっているものである」と解釈しています。昔は数えで年を表していましたから、今でいう満２歳ということになるでしょうか。そう思うと、世のお母さま方が､｢きょうだい一人ひとり､お腹の中にいる頃から、動きも性格もみんな違っていた」とおっしゃることも納得できるのです。

今から 20 数年も前のこと、ある研修で講師の先生にこう尋ねられました。｢教育の目的は、人格の完成であります。では、皆さんが初めて預かる６歳の子どもは、さて何％くらい完成しているのでしょう。」と。手元のワークシートに考えを書き、まわりの先生方と交流しました。私は、迷わず「80％」と書いていました。ところが､多くの方は｢20％｣｢30％｣と書かれていたのです。理由は、やはり「子どもは未熟であり、低学年のうちにしっかりと躾けることが大事だから。」と。

子どもたちの中にあるよい種（個性）は、そう簡単に壊れるものではないと私は考えています。ただ、まわりの大人たちの見方や接し方によっては、誰からも発見されることなく埋もれてしまうものでもあります。

学校は公教育の場であり、社会性を身につけさせる場でもあります。そのため、ルールを守ることの意味を教え、「ダメなものはダメ！」と毅然と指導することはとても大切なことです。しかしながら、一方で私たちは、幼い子どもも一人の人間としてしっかり受け止め､どの子の中にも必ずあるよい種(個性)を発見するという視点を失ってはなりません。「こんな自分でいいんだ｣｢自分にはなかなかすごいところがあるぞ」と、子ども自らが、胸を張って歩みを進めるきっかけを作ることができる大切な役割を担っているからです。

黒柳徹子さんの著書『窓際のトットちゃん』に登場するトモエ学園の小林宗作先生が、いつも口にしておられた言葉の中に次のようなものがあるそうです。｢どんな子も、素晴らしい才能を持っています。それを見つけて伸ばすことが大切なのです。」

将来を担うかけがえのない「宝物」と私たちは、日々接しています。尼崎の子どもたちが、自らを他人と比べて小さくなってしまうことなく、自分にしかない「三つ子の魂」に気づき、さらに自身で磨きながら、未来へ向かってたくましく進む姿を願いつつ、今後も日々の教育活動に励みたいものです。

☆☆先進地域への短期派遣研修と自由進度学習☆☆

「生徒みんなにとって学びのある授業とはどういうものだろう」

講師時代を含め今年で教師生活１０年目になる私の悩みです。悩みを解決するための１つの手段として、昨年度から自身の英語の授業において「自由進度学習」という授業形態を始めました。「自由進度学習」とは、教師が計画する学習内容の枠内で、生徒一人ひとりが課題を自己決定し、計画を立てて自分の学習速度で進め、その過程で友達や教師と相互に作用しながら学びを深めていくことを目指した授業スタイルです。

昨年度、私は「先進地域への短期派遣研修」としてドルトン東京学園に５日間お世話になりました。ドルトン東京学園は「自由」「協働」を軸に教育活動を行っており、各授業では「生徒の主体的な学び」、「個別最適な学習」や「協働的な学び」を重視していました。私が昨年度から試行錯誤している「自由進度学習」についても先進的に実施しており、たくさんのことを学ぶことができました。

私が感じたドルトン東京学園の様子を簡単に説明すると、とにかく「自由」。朝、登校してきた生徒の髪型や服装はもちろん自由。学校の階段に座って雑談する生徒やきれいで広い校舎の各所に配置されたソファに横になりながら本を読む生徒、自分のスマホを使って他学年を交えた集団でゲームを楽しむ生徒もちらほら。その様子は学校というよりもショッピングモールに近いものを感じ、勤務校で規則や校則を生徒に伝えている身からすると、あまりにも刺激的な光景でした。

『ハチャメチャな授業』、『いわゆる崩壊した授業』が行われていることを想像しながら、授業教室をのぞかせていただくと、そこには活発に意見を言い合い、授業内容を自分事として考えながら積極的に学ぶ生徒と、そんな生徒たちをサポートする教師の姿がありました。

もちろん、『先生の話を聞く姿勢』『授業者である先生への態度』といった部分に焦点を当てると、ドルトン東京学園の生徒たちにその力が身についているとは思えません。

しかし、先生から与えられた課題をただただ進めている生徒はいません。生徒たちは間違いなく、「主体的に学習に取り組み」、それぞれにとって「最適な学習」を行っているように感じました。

今までの私は、教師側からのたくさんの指示のもと、【音声メインの学習】を【４技能をバランスよく】【学力の差に関係なく、生徒みんなにとって学びのある】授業を心掛けていました。そのために手の込んだプリントを準備したり、楽しめる要素をたくさん盛り込んだ活動を計画していました。しかし今思うと、現実の学級には、英語力はもちろん、性格や社交性、コミュニケーション能力などさまざま個性をもった生徒たちが在籍しています。その生徒たちにとって必要な学びのためには「教師がどう教えるか」ではなく、「生徒がどう学ぶか」にこだわる必要があるように感じました。

東京都調布市にある私立中高一貫校、ドルトン東京学園と尼崎市の公立中学校を比べると、いうまでもなく地域の課題や歴史、物理的な学校としてのソフトやハードがまるで異なりますが、この研修で学んだことを生かし、今の環境でできることを模索し、５年後、１０年後の社会で活躍できる生徒になってほしいと願いながらこれから教育活動を続けていこうと思います。

（日新中学校　教諭　村賀　洋介）

☆☆多職種連携のススメ☆☆

はじめに

「不登校、いじめ、発達の課題、貧困、虐待等、子どもを取り巻く様々な課題は多様化、複雑化しており、学校等の教育現場を基盤として関係機関と連携し、子どもの思いに寄り添って支援する福祉的援助活動が必要です。」これは、本年度こども教育支援課で作成している「スクールソーシャルワーカー活用ハンドブック」の冒頭部分です。

未来を切り拓く子どもたちを育てるべく、私たちの教育の在り方も変化しなければなりません。子どもたちの支援においても、チームでの対応や、多職種と連携し支援に当たることが求められています。

ここでは、教育委員会での教育相談内容や多職種連携についてお伝えします。

教育相談事業の種類

① 教育相談

教育や発達に困り感や悩みがある、４歳から１８歳までのお子さんについて、継続的な教育カウンセリングを実施しています。

② SSW（スクールソーシャルワーカー）の各校への配置

SSW は、『福祉』という専門的な視点から子どもの置かれている背景を探り、学校と協働することで、適切な支援につなげていきます。

③ 匿名報告アプリでの相談（中高生対象）

SNS カウンセラーが、匿名による相談に当たっています。平日午後７時半まで。

これらの教育相談体制が、子どもの育ち支援センター「いくしあ」と共にあり、連携を取りやすい体制となっています。「いくしあ」には『心理士・精神保健福祉士・保育士・社会福祉士・児童専門のケースワーカー・医師・保健師・作業療法士・言語聴覚士』など多くの分野の専門家がいます。これらの専門家が、先生方と同じく「子どもたちのために」働いています。この思いは学校と同じですね。

つながりを大切に

では、どのように多職種連携をしていくのでしょうか。以下に示しますが、きっと特別なことをする訳ではないと感じられるでしょう。

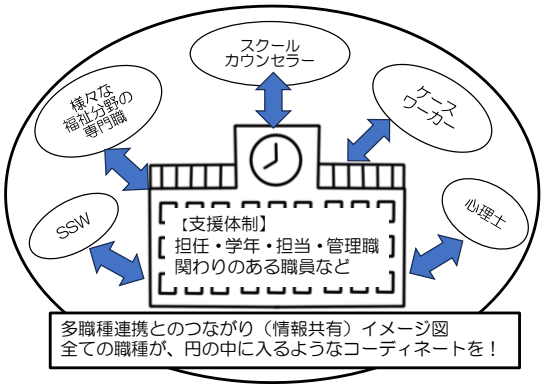
①校内での**情報共有**
②連携機関（多職種）との連携
③ケース会議等での**情報共有**
　→プランニング（支援の計画）
④支援の実施
⑤支援中の**情報共有**

上記の①～⑤の流れの中で、情報共有という言葉が３回出てきています。これは、教師も含めた多職種同士が「つながる」時間と捉えてください。教育に人と人との関わりが欠かせないように、支援にも他職種・多業種など様々な人同士のつながりが大切です。

また、課題の多様化・複雑さが増す今、この**情報共有**が大きな鍵となります。情報共有を基にした適切な支援を円滑に進めるには、体制作りも重要です。この体制作りも、人と人とが「つながる」ための仕組みづくりです。体制を構築することで、多くの人が適切な支援に関わり、子どもを育てていくことができ、未然防止や早期支援にもつながります。小さなことの積み重ねにより、学校が変わっていくのです。

おわりに

子どもたちの学びに個別最適化と協働的な学びの両立が叫ばれています。私たちも、多職種と協働し個に応じた支援に当たるということの必要性を日々感じています。この文が子どもたちの支援への一助となれば幸いです。



（こども教育支援課　係長　日高絵里子）

教育情報コーナーのお知らせ

☆教育情報コーナーのご案内

教育情報コーナーでは、先生方に利用していただきたい本や資料、雑誌等を整備しています。また、必要な図書、資料等のご相談にも応じております。お気軽にお尋ね下さい。

（３Ｆ　教育情報コーナー）

【新着図書】

・『２０４０教育のミライ』　礒津政明　著／実務教育出版
・『子どものために教師ができること』　田中博史・盛山隆雄　著／東洋館出版社
・『「学び合い」誰一人見捨てない教育論』　西川　純　著／明治図書出版
・『転移する学力』　奈須正裕・岡村吉永　編著／東洋館出版社
・『「叱らない」が子どもを苦しめる』　薮下　遊・高坂康雅　著／筑摩書房
・『小学1年生はなぜ椅子でシーソーをするのか』　山崎雅史　著／明治図書出版
・『教育「変革」の時代の羅針盤　「教育ＤＸ×個別最適な学び」の光と影』　石井英真　著／教育出版
・『学校行きたくない　不登校とどう向き合うか』　榎本博明　著／平凡社

（担当　松浦）

☆「ひと咲きタワー」は、学びのタワー！

【本の紹介】

■『“令和型不登校”対応クイックマニュアル』2024年2月初版発行　株式会社ぎょうせい

著者　神村　栄一：新潟大学人文社会学系教授（教職大学院主担当）。心理学博士（筑波大学）/公認心理士/臨床心理士/専門行動療法士。専門は臨床心理学（認知行動療法）教育相談、新潟県教育委員会「中1ギャップ解消調査研究」の座長等、多方面で活動。

主な著書：『学校でフル活動する認知行動療法』（遠見書房、2014年）等多数。

大学教授であり、臨床心理士でもある筆者が、令和型と表現した最近の不登校について、その状況分析、未然防止、事例対応という観点でまとめられている。決定的な要因が把握しにくい、支援のポイントが定まらないといった最近の不登校の特徴や、不登校リスク、いじめとの関係、支援や対話のポイント等、具体例を挙げながら説明されている。

■『ぼくたちには「体育」がこう見える』2024年2月初版発行　　株式会社大修館書店

著者　為末　大：1978年広島県生まれ。スプリント種目の世界大会で日本人として初のメダル獲得者。男子400mハードル日本記録保持者（2024年1月現在。）　現在はスポーツ事業を行うほか、アスリートとしての学びをまとめた近著『熟達論：人はいつまでも学び、成長できる』（新潮社）を通じて、人間の熟達について探求する。

主な著書：『諦める力』（プレジデント社）『走る哲学』（扶桑社）等多数。

著名なアスリートである筆者が、体育・スポーツ関係者だけでなく、様々な分野の人たちにいろいろな視点で体育を語ってもらう、対談形式の本である。体育・スポーツに関する様々な見方、考え方から身体や心に関する多くの情報が含まれており、示唆に富んだ1冊と言える。

※教育総合センターには、すてきな本がたくさんあります。　（担当　西川）